

#### 4 シスター・ローザ

##### I

吊いの鐘が鳴る  
死を告げる鐘の音が  
山に木霊する  
今 黒衣の修道士は  
頭巾を目深に被り  
部屋に独り座っている

5

##### II

死の冷たい手が  
修道士の震える息を凍らせる  
耳には恐ろしい歌が聞こえる  
それは 天翔る亡霊どもが  
一斉に通る過ぎる時  
一日の終わりにあわせてうたう歌  
容赦ない運命の女神が  
ローザの肉を土くれへと腐朽る時を  
亡霊どもはうたう

10  
15

##### III

その時は過ぎた  
それは 修道士の脳ずいの髓から永遠に  
平安が去った瞬間だった  
目からは熱い涙が静かに溢れ出た  
抑えようにも抑えられなかった

20

##### IV

美しい金の十字架を床に投げつけた  
吊いの鐘が耳に突き刺さる  
「ローザには これからずっと  
喜びがある  
私にあるのは 破滅と戦慄と恐怖だけ」

25

##### V

吊いの鐘が鳴った時  
目をぐるりと回し  
恐ろしいほどの苦痛に荒れ狂い  
地団駄を踏んだ  
鐘の音が止むと  
涙がまた溢れ出る

30

VI

凍てつく絶望の痛みで  
激しい不安の鼓動は凝まり  
ただ口もきけずに苦悶の中 座っていた  
ついに 雲ひとつない夜空に星が瞬き  
青白い月明かりが丘を照らした

35

VII

修道士は部屋で 跪いた  
地獄の恐怖も  
苦悩の痛みに比すれば喜び  
修道士は神に祈った  
永遠なる呪いを解きたまえ

40

VIII

跪き 一心に祈りを捧げた  
ついに修道院の鐘が真夜中 1 時を打った  
燃えたぎる血が その鐘で凍てついた  
虚ろな声が 恐ろしい声が 耳もとに囁く  
「お前の懺悔のときは終わった」

45

IX

夜の闇が濃くなり  
輝く月の光が  
山の頂で翳っていった  
暗い山から声が  
冷たく低い声がした  
「修道士よ いつでも死ぬがいい」

50

X

修道士は立ちあがった  
心臓は激しく鼓動し

四肢は恐怖で麻痺した 55  
青ざめた額は  
墓地の露で濡れ  
死者と眠ることに震えた

XI

真夜中の大嵐が  
大柄な修道士の周りを荒れ狂う中 60  
礼拝堂の裏手の暗がりを探し求めた  
踏まれた草が吹きすさぶ風にあわせて  
ひゅうひゅうと揺れる中  
修道士は真新しい墓を探し求めた

XII

暗く大きな亡霊どもが 65  
修道士の周りを飛び  
その叫び声は風の音と混じりあうようだった  
真っ黒い壁に  
ぼんやりと いくつもの影が浮かんだ  
修道士は恐怖に慄きながら進んだ 70

XIII

嵐の悪鬼どもが  
真新しい墓の上で暴れまわる  
恐ろしい亡霊どもが蠢<sup>うごめ</sup>いている  
修道士は神に救いを求め  
恐怖のあまり 顔<sup>くずお</sup>れた 75

XIV

絶望が腕に力を与え  
呪いを追い散らそうと  
ローザの棺を打ち破った  
すると激しい嵐は  
なお一層 凄まじく吹き荒れ 80  
雷が轟き渡った

XV

悪鬼の群は喜びで声をたて  
腐<sup>く</sup>ちゆく亡霊どもと一緒に笑った

悪鬼どもが宙に舞うと 不気味な翼が  
高く恐ろしい音をたてた 85

XVI

死んだ修道女の墓から骸骨が起き上がった  
地獄の冷たい露を滴らせ  
腐<sup>く</sup>ちた眼球に青白い炎が宿り  
墓に佇む黒衣の修道士を  
勝ち誇ったように照らした 90

XVII

女の腐<sup>く</sup>ちた手が修道士の震える頭をつかんだ  
恐怖が力を与えた  
「私はもう生きられぬ  
死が私の悲痛な苦しみを終わらせるのだ  
地獄が大きく口を開ける そこであなたと会おう」 95

XVIII

骸骨の肺が音をたてた  
恐ろしく 寂しく 凄まじい音  
長く長く地面が揺れた  
容赦なくその音が漂うと  
低い呻き声が地獄から応えた 100

(伊藤真紀訳)